



— 上 神賑隊 下 御神幸 —

本年第十回をむかえ
神賑隊 奉納行事も愈々盛大に

八月五・六日の両日
日南市油津港へ

御神幸祭 斎行される



発行者兼編集者
鵜 戸 神 宮
社 務 所
印刷所
西 日 本 印 刷



ごあいさつ

宮司長 友安 美



爽やかな秋の季節となり、氏子・崇敬者の皆様には、愈々ご清遊にてお越しの御事と存じ上げます。

去る八月五、六日に齋行致しました、日南市油津への御幸幸祭は、台風の影響により、予定の海路による御渡御が出来ませんでした。幸いにも陸路にて油津港の御旅所まで御幸幸でございまして、また市内の御巡幸では、多数の方々、賑々しく神賑隊を繰り出して供奉して頂き、まことに有難うございました。お陰様にて当神宮の御幸幸祭も、今年でちょうど十回目を了えさせて頂きました。ここに十年の節をむかえるにあたり、御幸幸奉養会をはじめ、ご助力賜りました関係諸機関、諸氏に厚く御礼申し上げます。

さて、現今我が国では海外旅行の熱がますます高まりつつありますが、これが反面、物見遊山のなレジャーとしてのみ、捉えられていることは、実に残念なことでもあります。

小職、過去数度の海外渡航のうち、特に去る昭和五十一年の、神道国際友好会主催によります神道書籍贈呈親善使節団の一員として、米國を訪れた経験は、今でも印象深いものがあります。それは、米國建国二百年の佳年に、我が國文化の中核ともいへべき神道を理解してもらうべく、神道書籍を携えて渡米し、これが我が國と米國との友好の実をあげる一役をはたし得たことはいまでもありませぬ。が私自身米國の二百年にして、未開の原野から世界第一の大國にまで成し上げた、そのフロンティア精神とバイタリテイに驚嘆し、かつ畏敬の念を抱いたものでした。

られ、これからの神職は外國のことも知らなければならぬ。それでこそ祖國や、自分自身が再認識できる。というお話しをされておられたのであります。小職もまったく同感でありましたので、帰国しましたら早速、毎年宮崎県内の若手神職数名を外國諸國へ派遣すべく、計画をいたしました。なにしろこれは、費用もかさむ事でありますので、当宮と青島神社の予算より折半ということにして、すでに昨年は歐州各國へ四名の若手神職を遣し向け、各地方において宗教、経済、文化事情を具に見学させたのであります。この計画は、今後永年続けて行くつもりであります。が、これからの神社界を担う若手神職の諸君が、この海外派遣により、他國家、他民族をより深く理解し、自分自身の視野を広めて、日々の神明奉仕に精進するならば、私の望外の喜びでございます。

御神幸祭を齋行

八月五六日の両日

恒例の鵜戸神宮御神幸祭は、早くも十回を数えることになり、今年八月五、六日の両日に執行された。例年なら七月の第三土、日曜日に日南市の港まつりに併せて齋行されていたが、台風の影響で、お盆に帰港する漁船等のことを考慮して、今年八月の第一週を予定、開催が決定された。ところが皮肉にも、見送かした様に台風が発生、七月下旬より海上が大荒れに荒れた。素晴らしい一大絵巻をくりひろげる海上渡御が中心の当宮御神幸祭は、御座船や他の漁船が南方の島々の港に避難したため、当日まで帰港することができず、陸路による御神幸に変更された。

当日は、真夏の太陽が照りつける中、時々小雨がぱらつくという夏特有の天候であったが、午後一時、本殿にて御神幸祭は盛大に執り行われた。召立の儀のあと獅子を先頭に八丁坂参道を通り、御神幸は、例年だと鵜戸港に向うのであるが、陸路に変更されたため、鮮やかに盛



隊特務艇81号の体験航海があり、大島を一周する同船には、多数の子供達が乗船した。夜は御旅所前会場において、鵜戸さんいさみ太鼓も奉納された。庄巻は午後八時からの花火大会で、仕掛けが十基、打上げは二千発発打上げられた。ことしは花火の種類も豊富で、間断なく、打上げる色とりどり花火に見物客は大きな歓声をあげ、納涼をかねた約三万人の市民をたっぷり喜ばせた。

翌日は、勤労青少年ホームでは少年剣道大会、油津公民館では弓道大会等、奉納大会が催されたが、特に御旅所近くの油津港中央突堤では、四半的の熱戦中。観手の熱い眼を浴びながら正午、御還幸祭を齋行。油津港を後にして御神幸祭同様、陸路にて本宮へむかい、御還幸本宮祭を執行して、酷暑の中、本年の御神幸祭はつづがなく終了した。

鵜戸神宮御神幸祭に奉仕して

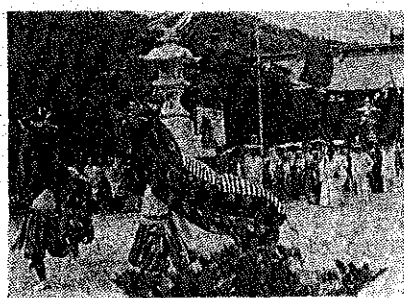
日南高校二年 小城 久史

僕は、この鵜戸神宮の御神幸祭に奉仕してとてもよかったと思っている。それは、この御神幸祭が日南市の重要な一年に一度の催し事だったからです。しかし、二日間も奇妙な衣装を着て油津の町や鵜戸を歩いたのは少し苦しかったし、汗で衣装がくっついていて、二日目は足袋や履を履るのに少し気が進まなかった。

でも僕たちは、御神幸祭が終わってからは、バレーボール部のキャンプがあり、それに持っていくお金を家の人からもらわずに、自分で働いたお金で買ったので大変良かった。御神幸祭のパレードでは、僕は社名旗をもって、友達は大鼓やみこしなどをもっていったので少しその友達に気がひけた。油津のパレードでは、知っている人や友達が大勢見に来ていてとても恥ずかしかったが、そこはバレー部の意地でどうにかこうにか切りぬけた。鵜戸街を通るときには旗をたてられなかったのでも少し苦しかったが、休けいするとき飲んだ麦茶がとてもおいしかった。

奉仕する心

鵜戸中二年 江口 義郎



また来年も御神幸祭の奉仕がやりたいけれど、来年は試験も間近にひかえているので、来年の夏休みは勉強に力を入れてがんばらなければいけない。でもこの御神幸祭に奉仕したことは、夏休み初めの修学旅行とやらで夏休みのいい思い出になった。サンサンと照りつける夏の太陽の下。平安朝の衣装に、変装した人々が歩く。私たちの都とも言うべき鵜戸では、毎年「港まつり」が二日間行われて行われる。祭りの初日。神宮の洞窟の中で……。社務所内で……。緊張した雰囲気の中で私たちの祭り、鵜戸神宮御神幸祭が初まるのである。神宮本殿で、祭典を終えた私たちは、油津港に向かった。油津港では、すべてのものが私たちを待っていたかのよう

の祭りは、私たち氏子にとっで、奉仕作業のようなものであろうが、私たち、いや私には単なる祭りというイメージしかそこには無く、奉仕の気持ちには、一かけらもなかった。このとき私の頭には、単なる祭だけなら、それに参加する意味もなく、参加せずに見物の方にまわっても同じことではないだろうかという考えがあった。行列を続けている時に、顔なじみの人に会う。おたがいの口から、顔全体から、笑みがこぼれる。今年の行列は去年とは少し違う。今年は、外人さんも行列に参加した。「今年の祭りは国際

的だなあ。」と冗談を言うものもいた。初日の行列も終了して、今度はちびっ子たちの「いさみ太鼓」の奉納だ。私は笛をふくことになっているので、私たち五人の中学生は残って笛をふいた。心のうちでは、昼間の市内の行列ですでにつかれを覚えていた。一日目は、このいさみ太鼓の奉納で終わり、二日目も無事、私の役目の道楽をふきながらの行列も終わった。何もかもすんでしまつてみると、最初に思ったことがまた頭に浮かんできた。奉仕の気持ち、少しもなかったのかという。私には、祭りというもので、なくてはならぬ、あらゆるものや、ひとに奉仕しなければいけないのだと、今年の御神幸祭に参加して私はそう思った。鵜戸神宮御神幸祭は、これからも終わることなくつづくであろう。いや、私たちの奉仕の心でつづけていかなくてはならない。

ヨーロッパ駆け足(3)

権官司 佐藤美春

昭和五十二年

九月六日(スペイン)

スペインでは、朝食が八時、朝食が午後二時から三時半頃、おやつが午後五時から七時頃、夕食が午後九時から十一時頃だといふ。朝食は一日のうち一番御馳走で、一時間から一時間半くらいかけて、ゆっくり食べるのだといふが、私たち一行は、三十分くらいですんでしま

午後、申世が今なお息づくトレドへ。マドリッドから南へ七キロメートル、街の三方をタホルの丘に築かれたスペインの歴史を語る古い都で、十六世紀まで首都の置かれたところでもある。茶色の厚い壁と、小さな窓をもつアラブ風の民家。道は石を敷きつめ、それは細く、迷ったら出られない迷路になっている。まことに静かな中世の世界である。ここに九十メートルもの高さのゴシック風大聖堂が天に聳え立っている。スペイン人の敬虔な祈りを捧げるこの聖堂に敬意を表す。近くにゴヤの眠る

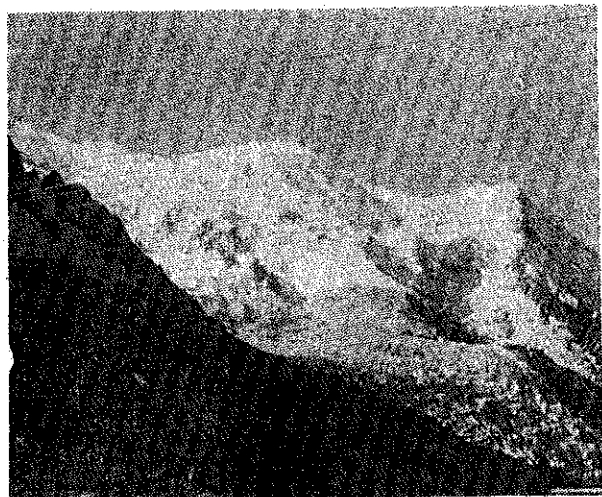
聖アントニオの隠れ家や、ゴヤの墓とフレスコの名画、さらには画家グレコの家美術館がある。

この日はマドリッド泊り。夜のハイライトであるというフラメンコの踊りは、十一時頃からというのであったが、暑い日の強行軍でダウン。みんな出掛ける元気がなかった。

九月七日(スイス)

スペインのマドリッドより、空路スイスのジュネーブに飛んだ。空港より、バスは有名な国際連盟本部の辺りを通り、水の都レマン湖を左に見て走る。水中より大噴水が一五〇メートルも水柱を上げています。モンブラン橋を渡ったところのレストランで朝食であった。飛行機の中でも朝食が出たので、皆がもう食べられないといったのであるが、前もっての契約であるから、ほんの一箸でも付けてくれという。次から次へと出て来る御馳走を、毒味の様に一箸ずつ付けたのであったが、まことに勿体ない事であった。

午後、レマン湖を左に眺めな



モンブランの山並み

がら、午前中とは反対に、湖畔に開けた木立の美しい公園を走る。やがて花に彩られたグランジュ公園に至る。六月には国際バラのコンクールが開かれるという。緑の植込みがすばらしい。隣りに品のよいレストランがあるオーピープ公園がさわやかに開けている。天皇陛下も幸の折ここでお休みになされたというのである。

その日はジュネーブ泊り。ホテルの玄関に、大馬車をかたどった機械だけの時計が時を刻んでいた。さすが時計の国である。ホテルに着くと、家内は日課

のように下着類の洗濯である。用意のロープを張り、風呂場はもちろん、多い時は部屋まで、まるで展覧会のようなのである。スイスの貨幣はスイスフランで、一フランは約百二十四であった。

九月八日(スイス)

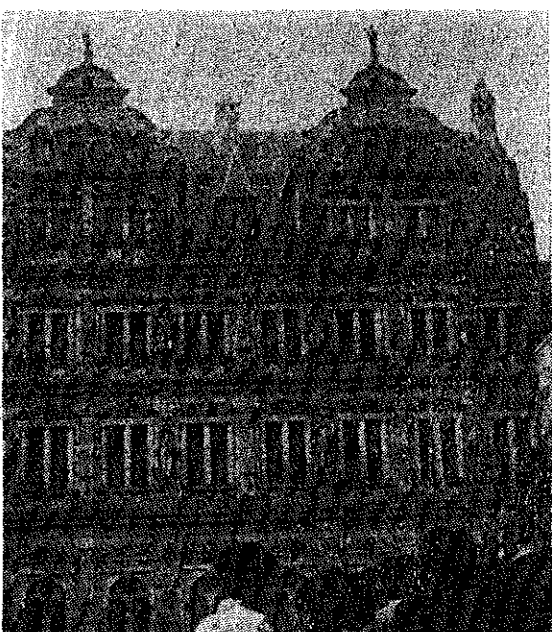
この日は、アルプス連山のモンブランに登るといふので、冬支度で出かける。ここは、ジュネーブから七五キロメートル、途中からフランス領になるため、国境通過の時は銃を持った警備兵の目が光った。一目で頭数がかかる様に、パスポートを

持ち、しゃんと座って神妙に点検を受けた。標高一〇三五メートルのシャモニーから、さらに三八四二メートルのエギーユ、デュ・ミディの頂上まで、世界一高い、スリルのある大型ケーブルウエイが三十分ほどで運んでくれる。四千メートルのモンブランの山並がぐんぐん迫って、まことにダイナミックである。お天気は上々、展望台に立つと、雪煙をあげるモンブランの連山が目前に開け、眼下に氷河を眺めると雄大である。思わず感激(寒激?)に震えて早々に山小屋に逃げ込んだ。朝食はシャモニーでとった。下界は夏の暑さである。ジュネーブに降り、このシンボルドもある、巨大な群像の宗教改革記念碑をみる。これは十六世紀、フランス人カルバンがこの地に亡命して来て、宗教改革を説き、市民の生活や、政治まで神の絶体的権威を反映させたというカルバン派の四人の立像である。

九月九日(西ドイツ)

スイスのジュネーブから、西ドイツのハイデルベルクへ汽車でむかう。車内はゆったりとして、窓側に通路を設け、部屋を六人ずつに板壁で区切り、ドアを設けて席は三人ずつの向い合せである。汽車は湖に沿って沿線のブドウ畑を見おろしながら快適に走る。ハイデルベルクはネッカー川のほとりに開けた古い街である。また一三六六年創立のハイデルベルク大学の街としても有名である。この学校はドイツの有用の人材を育てた大学で、その教育も厳格だったといわれ、校舎の裏手に、罰を受けた学生が入れられた二階建ての監獄が残されている。その各室の壁板はもちろん、天井といわず、廊下、階段、便所とあらゆる所に、学生の叫びが余地なく無教に書かれており、住居の状況を物語っている。

山手に、十三世紀に建てられたという、ハイデルベルクの古城がある。城には深い堀があり、敵の攻撃にはこの堀にライオンを放したともいふ。この城に、税金の代りに徴収したブドウ酒を入れる、なんと二十二万リットル(約千二百石)も入る、とてもない大酒樽がある。樽の上には舞台が設けてあり、この



胸のびっくり箱から、ひょうきんな顔をした番人の人形が飛出して、徳光客をおどろかしている。これがトラップに出て来るおどけもののジョーカーである。この大酒樽の思い出と小コップに一杯ずつのブドウ酒がサービスされた。家内の分まで呑んだのでよい気色になり、過ぎにし昔、この大酒樽上の舞台上で王侯貴族が夜を徹して催した、呑みや歌えや踊れやの豪華な宴が偲ばれた。

ある人がこの岡に散歩に行つた時、そこに学生の若い男女のまことに仲睦まじい場面に出会った。なにげなく「あなた方は何をしているのですか。」と尋ねたところ、この学生は「哲学を勉強しているのです。」と答えたといい、それ以来、この岡を哲学の岡と呼ぶようになったのだそうである。

九月十日(西ドイツ)

午前中は自由行動であった。SさんUさん夫妻と、マイン川の畔に出てみる。花と緑樹の美しい散歩道があり、水は豊かに

悠々と流れ、フランクフルトはこの河を中心に築きあげている。午後市内見学。有名な詩人ゲーテが生れ育った家がある。ここは第二次世界大戦の災に会ったが復元され、ゲーテや、家族が愛用していた備品、家具、楽器及び作品が展示されている。次にフランクフルトの象徴の市役所へ。この裏手に、皇帝用ホールを備えた公会堂がある。現在は市の迎賓室として使われている。昔は戴冠を祝う宴会場に使用され、各地の支配者、貴族、高僧などが招かれた室だといふ。特に印象に残ったのは、市役所前に立てられていた三本の旗が、黒い布をつけ、弔旗になつていた事である。これは、国の顔役である財界のシュライヤー工業連盟会長が、西ドイツ赤軍に誘拐されたので、国民の怒りと悲しみを表わした弔旗だといふ。ただならぬ気配が漂っていた。

夕刻フランクフルト空港へ。機内持込みの手荷物の検査が厳重であった。一行のナイフ類は一括して一つの袋に入れて係員に預けた。女性の検査官が家内の肩掛カバンを開け、手を入れてひとつひとつ品物を見ていたが、紙に包まれたおふし大の固い物を見つけ、顔を急に険しく



写真はハイデルベルクの古城

社務日誌抄

五月二十四日 別当宮司先賢慰靈祭
住吉大社祿宜野々口正夫氏他六名正式参拜
五月二十七日 神社庁南那珂支部総会に権宮司他職員出向
五月二十八日 小村寿太郎侯揮毫の掛軸を松田民夫氏奉納
五月三十一日 鵜戸美化愛護協会総会を開催
六月一日 月次祭
当宮敬神婦人会鹿兒島県へ参拝旅行
六月七日 二見興玉神社宮司杉谷房雄氏他十四名正式参拜
西日本神道講義研究会に職員参加(於宮崎市)
六月十日 緑日祭
六月十一日、十四日 職員研修旅行(第一班) 富山・岐阜方面に出向
六月十六日、十九日 職員研修旅行(第二班) 富山・岐阜方面に出向
六月二十一日 阿蘇神社宮司阿蘇雅友氏他十名正式参拜

六月二十八日 鶴岡八幡宮祿宜小坂昌美氏他四名正式参拜
六月二十二日 神道青年会南那珂支部会に職員出向(日南市)
六月三十日 住吉神社九柱神社例祭大被

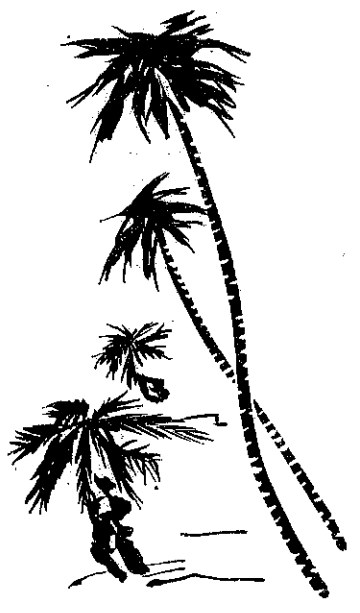


七月一日 月次祭
七月二日 富士海水浴場開き清被奉仕、いさみ太鼓を奉納
七月四日 緑日祭
七月四日、十日 宮司神道国際友好総会出席(於福岡県)
神道行法鍊成講習会に職員出向
七月六日 栃木県神社庁副庁長柳田耕平氏他四名正式参拜
七月八日 氏子総代会御神幸祭の件につき明催
七月十日 責任役員会開催
七月十三日 昭和遷座記念祭
権宮司、東宮御所、常陸宮家へご挨拶に出向
七月二十七日 吹毛井鎮座尼権例祭奉仕
八月一日 月次祭
八月四日 御神幸祭前夜祭

八月五日、六日 御神幸祭
八月九日 緑日祭
八月十日、十三日 権宮司権正階基礎研修会 講師として神社庁出向
八月十六日 国学院大学岩本教授を囲む会に職員二名出向
八月十七日 院友会(宮崎市)に宮司他職員二名出向
八月十七日、二十九日 神道青年会北方領土早期返還運動に職員二名参加
八月十七日、二十二日 世界の祭祀シリーズ(インドネシア)に職員参加
八月二十日 南那珂郡氏子総代研修会が儀式殿にて開催
八月二十一日 学校法人清風学園平岡英信氏他七十五名正式参拜
権宮司西田杵那神職研修会に講師として出向
八月二十三日 大國魂神社宮司渡邊盛文氏他一名正式参拜
八月二十六日 元海軍兵学校第十九期学生会十八名正式参拜
八月二十八日 鵜戸小学校体育館起工式奉仕
写真は大蔵の茅輪くぐり

職員異動(8)

七月二十日 願いに依り其の職を解く 斎女 前園 昭子



バリ島視察記

権祿宜 黒木 忠仁

赤道に沿って帯状にのびる三千余の島々からなるインドネシア、その中に東京都の二倍程の大きな島、バリ島が今回の視察の目的地である。インドネシアはアジア大陸・フィリピン・オーストラリアに囲まれ、ジャワ・スマトラ・カリマンタン・スラベシ・西イリアンの大きな島によって形成されている。この国の人々の九割程度は回教に属しているが、バリ島だけはヒンズー教を守りぬき、ヒンズー文化を残しているのである。バリのヒンズー教は十五世紀、ジャワのモジャパイト王朝が回教徒に追われてこの島に逃げこみ、ヒンズー文化をもたらし、現在のバリ独特のヒンズー文化を築きあげたのである。

八月十八日、国学院大学の小野和輝先生を団長と仰ぐ、十五名の団員はセンパティ航空〇〇八便にてバリ島に向けていざ出陣である。七時間の空の旅を終えるとそこは赤道直下のバリ島であった。ホテルは空港近くのウタビーチを臨むプリタミナコテージで、大変きれいなホテルである。



プサキ寺院

夕食はデンパサル市(バリ島で一番大きな市)郊外のバリヌサルレストランである。インドネシア特有のガメラン音楽に合わせた、ダンスの饗宴であった。翌朝、バリ島最大の寺院であるプサキ寺院(写真)の見学である。プサキ寺院はホテルより一時間半(車で)程の距離にあり、途中、金・銀細工の村、木彫の村などを見学し、また運よく闘鶏を見学することが出来た。闘鶏はテレビ、映画などの娯楽がない社会の大きな娯楽の様であり、大人・子供などの熱狂的な雰囲気の中で行なわれていた。

プサキ寺院へは午後一時過ぎに到着である。寺院は小高い山の頂上の下に有る。中央に大きな寺がありヒンズー教のえらい坊さんによってまつられており、多くの参拝者が毎日毎日あつとをたたない。また中央の寺院を囲む様にそれぞれの部落の寺が集って、その数は数百であると思われた。この寺を参拝する人々は、部落の葬儀の不浄祓いや、また祭りの前の清祓的な意味で、部落ごとにお供えを頭にのせて集って来るものなのだそうである。

夕食はデンパサル市内のレストランにて海鮮料理である。魚のフライやイセエビの湯である。揚げたイキのいいものであるが、調味料の使い方が日本と違うためあまり食べられない。

二十日朝、善と悪との果てしない闘いを描いた、パロンドンズを一時間あまり見学した。これは、パロンと言う日本の獅子に似た善と、ランダと言う醜怪な獣で秋田のナマハゲに似た悪との戦いであり、最後は善なる従者等が悪のさし向けにより、自分自身にクリス(刀)を突き刺しているところを、寺僧の聖水をかけられ、悪のさし向けが解かれる、というものである。

その夜、現地ガイドのアジャラ氏の家へ招待され、小豚の丸焼きと、一般家庭の料理がふるまわれたが、右手で直接米を口に運ぶ芸当などとても出来ず開口した。小豚の丸焼も異様さが先に走り、最初の皮の部分が少し食べられたぐらいで、あとは果物を食べて腹をみたすはめになった。ガメラン音楽を舞子と一緒にダンスに興じたのも良い思い出となった。

二十一日バリ島最後の日、午前中ホテルのプールとビーチでゆつくり水泳に興じ、赤道直下の太陽をそんぶんにあびて過した。昼より、デンパサル市を自由に見学し、夕方六時よりケチャックダンスの見学である。これは猿のダンスであり、ラマヤナ伝説に基づいて半裸の男達が円陣を組みケチャック……ケチャック……ケチャックと猿の鳴き声に似せて合唱を繰り返す、万歳をした手を微妙にふるわせておどるダンスである。暗闇の中にこだまする、幻想的なケチャックのコーラスはバリ独特のムードをただよわせてくられ、半裸の男達も酔狂する感じであり、見学の人々も一種異様な雰囲気の中に吸いこまれた。種々の思い出を残して、バリ空港よりセンパティ航空〇〇七便で帰途についた。

鵜戸山散歩 (8) 鬼の洗たく岩



みなさん、洗たく板をご存じ
でありましょうか。

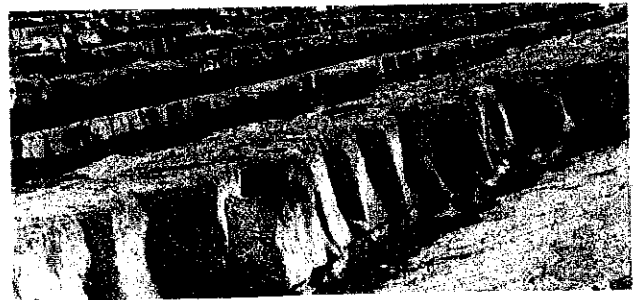
今はその名前すら知らない現
代っ子たちが多いことではし
ょう。なぜなら、その存在価値は
電気洗たく機に、とって変られ
ましたから。念のため、洗たく
板は、縦・横に刻みを入れた木
の板のことです。この上
に洗たく物を置き、石けんを付
けては、ゴシゴシとたらいの中
で洗ったものでした。

今回の鵜戸山散歩は、洗たく
板(岩)にご案内致しましょう。

洗たく板と申ししても、た
らいに入る板きれではありません。
「鬼の洗たく岩」と呼ばれ
るものであります。

道にせまる断崖、紺碧の海、
強烈な太陽、波状岩に砕ける白
波など自然の景勝につつまれた
ロードパーク・日南海岸は、ま
さに観光名所の象徴でもありま
す。

特に青島の周囲や、それ以南
の海岸線に広がる波状岩は、「
鬼の洗たく岩」として、宮崎を
旅した方々にとって何よりの印
象深いものがあることでしょ
う。



鬼の洗たく岩

「鬼の洗たく岩」は、日南海
岸線一帯に、帯状に連なる自然
の岩で、この地方の地層は、第
三紀青島層に属しております。
これは砂岩と粘板岩が交互に、
折り重なり合うようになってい
るもので、この互層が、打ちよせ
る波によって、やわらかい砂岩
がけずりとられ、かたい粘板岩
が残って、洗たく板の状を成し
たものと考えられております。
この様子や、雄大さが、かつて
用いた洗たく板によく似ている

ので、ユーモラスな日向人は、
これを「鬼の洗たく岩」と名付
けたのです。

当神宮の鎮まります、鵜戸岬
の先端は、広大な岩畳と切り立
った断崖とでなりたっています。
この岩畳が「鵜戸千畳敷奇
岩」といわれるもので、同じく
洗たく板の様をなしています。

永い年月のうち、地層の厚
薄、硬軟が日向灘の荒波によっ
て、洗たく板状の岩畳や、怪奇
な渦巻模様の岩肌を作りあげた
ものであります。これは昭
和八年十二月に、県指定の天然
記念物に指定されております。

海幸彦・山幸彦の活躍の舞台
となった神代の昔よりこのか
た、「鬼の洗たく岩」はいつた
い何を洗ってきたのでしょうか。
太平洋という大きな「たらい」
にどっふりと浸かり、自分自身
の身を粉にしながら、その時、
その時代の人々の魂を洗い続け
てきたに違いありません。「鬼
の洗たく岩」は、今後も荒廃し
きってしまった現代人の人心
を、何度も洗ってくれるこ
とでしょう。

繰り返す潮騒が、私にはこう
聞こえるのです。(本部)

× × ×

朝夕など、めつきり秋の気配
を感じさせる今日此頃となりま
した。皆様いかがお過ごしでござ
いますか。

当地方のほとんどの田んぼ
は、早期水稲の取り入れもす
にすみ、稲の切り株や、わらこ
づみなどからは、出来秋のあと
の一段落といった感じのする田
園風景でございます。

ここに社報第十二号をお届け
致します。

今回は、本年度で丁度十回目を
むかえました、御神幸祭事を
中心に、カラー刷にて発行する
ことができました。

さて元来わが国は、稲作を中
心とした農業国であります。し
かしながら国の施策として、米
の生産調整による転作、休耕な
どから田畑の荒廃は進む一方
であります。第二次、第三次産業
の重要なことは言うまでもあり
ませんが、食料の自給は一国存
立の基本であるとの観点から、
第一次産業、特に農業を軽んず
るわけにはまいりません。

将来の世界の食料危機を考慮
しますと、穀物など主要食糧の
自給度向上を計るべきでありま
すし、そのある程度の備蓄をも
考えておかなければならないで
あります。(本部)